

〈日本人〉の境界

小熊 英二著

評者・野村 進

私を含む日本人の大半は、自分が「日本人」であることをごく当然のこととして暮らしている。だが、私はなぜ自分を「日本人」と断言できるのか——。そう問われたとき、はたと考え込む。

国籍が日本だから？ それなら、私がたとえば韓国の国籍を取れば「日本人」ではなくなるのか。親や祖父母が日本人だから？ では、それをどうやって証明するのか。日本に生まれて住んでいるから、日本語をしゃべれるから、日本人らしい風貌をしていから……。どれも答えになっていない。結論を言えば、「日本人」に限らず国民や民族を厳密に定義することは不可能なのである。それなのに、私たちは「日本人」というきっちりした枠組みがあるかのように考えがちである。

定義いた動揺 証に密綿

本書は、明治以降、日本の国策下に置かれた沖縄の人々、北海道のアイヌ、朝鮮や台湾の原住者たちが、どのように「日本人」に組み込まれ、あるいは「日本人」ではないものとして扱われたかを綿密に検証しながら、「日本人」の境界について論じている。もともと博士論文として書かれた八百ページ近い大部の著作なので、すらすら読めるというものではないけれど、論の進め方も文章も明晰で、読んでいて気持ちがいい。内容は多岐にわたり、ここではとても紹介しきれないが、とりわけ印象に残るのは沖縄や台湾、朝鮮といったマイノリティの知識人たちの痛ましくも誠実な姿である。

日本政府が「日本人」の境界を、そのときどきの国益によって都合主義的に決めていく中で、マイノリティの人々は国家が必要とするときは「日本人」として同化を強いられ、不要なときには「非日本人」として排除されてきた。この「日本人」であって「日本人」でないという位置に、だがしかし、著者は行き詰まりつつある国民国家やナショナリズムを超える可能性を見出している。日本を含むアジアに関心のある読者にとっては、必読の書となろう。(新曜社、5800円)

◇おぐま・えいじ 一九六二年
東京生まれ。慶応大学総合政策学
部教員。著書に『単一民族神話の
起源』(新曜社)。

